

# 農村生活アドバイザーによる地域住民への食農教育体験会の取組

～農家と地域住民の「食と農のかけはし」となるために～

八木祐介（東三河農林水産事務所農業改良普及課）

【平成30年11月21日掲載】

## 【要約】

愛知県農村生活アドバイザー協会東三河支部豊橋ブロック（会員26名）は、地域住民に豊橋市の農業や農産物を理解してもらう目的で、平成24年度から会員が講師となり、農作業や農産物加工の体験をメインとした食農教育体験会を開催している。この取組は、消費者の声を聞く良い機会となっており、また農業経営へのモチベーション向上等にも繋がっている。

## 1 取組開始の経緯

愛知県農村生活アドバイザー協会東三河支部豊橋ブロック（以下「豊橋ブロック」という。）では、これまでも豊橋市の農産物博覧会等のイベントを通じて地域農産物のPRに取り組んできた。しかし、「地域住民が地元の農産物に触れて、知って味わう機会がまだ少ないのでは？」と問題意識を持つようになった。会員同士で話し合った結果、地域農業の女性リーダーとして、農家と地域住民の「食と農のかけはし」となるような企画の開催を検討し、「見たい！食べ隊！豊橋農業！」をキャッチフレーズに、平成24年度から農作業や農産物加工の体験をメインとした食農教育体験会（以下「体験会」という。）に取り組み始めた。

## 2 取組内容

### （1）体験会の内容

豊橋ブロックでは、地域住民に豊橋市の農業と農産物を理解してもらうことを目的に、表1のような体験会を年3、4回開催している。平成29年はシクラメン寄せ植え体験、みそ作り体験、トマト選果場見学及びトマトジャム作り体験を実施した。

例えば収穫・寄せ植え体験では、最初に、参加者を会員のほ場に案内し、農産物がどのように栽培されているか実際に見学し、農業現場の状況をしっかりと理解してもらう。その後、更に理解を深めるため、収穫や寄せ植えなど実際の農作業体験を行う。

また、農産物加工体験では、調理施設のある市や農協等の施設で、会員のほ場で生産された農産物を活用した料理や調

表1 体験会の内容

年度	内容
24	バター作り体験
	柿の選果場見学とドレッシング作り体験
	シクラメン寄せ植え体験
	みそ作り体験
25	ミニトマトジュース作り体験
	キュウリの収穫体験と漬物作り体験
	シクラメン寄せ植え体験
	みそ作り体験
26	五平餅作り体験
	シクラメン寄せ植え体験
	みそ作り体験
	生キャラメル作り体験
27	イチゴ収穫・パック詰め体験
	鬼まんじゅう作り・茶の入れ方講座
	シクラメン寄せ植え体験
	みそ作り体験
28	五平餅作り体験
	シクラメン寄せ植え体験
	みそ作り体験
	キャベツ収穫体験
29	シクラメン寄せ植え体験
	みそ作り体験
	トマト選果場見学とトマトジャム作り体験

味料作りの体験を行う。講師は調理方法だけではなく、栽培方法等材料として使った農産物に関する知識を教えることで、参加者に地元農産物に対する関心を高めてもらい、消費拡大に繋げている。



農作業体験の様子(キャベツ収穫体験)



農産物加工体験の様子(みそ作り体験)

## (2) 運営方法

講師は会員のうち1、2名が持ち回りで担当し、他の会員は運営のサポートを務める。体験会の運営は、企画から参加者募集、講師や当日の進行まで会員が主体的に行っており、内容の検討は主に月1回の定例会で、意見を出し合っている。

参加者募集は、豊橋市やJA豊橋の広報およびポスターの他、特に会員が地元ラジオ番組に出演して積極的に情報発信を行っており、広報面にも力を入れている。応募要件は特に決めていないが、子どもを対象とした体験会については、小学生とその保護者での応募に限定している。

## (3) 地域住民からの反響

農作業体験・農産物加工体験ともに、地域住民が農業者との交流を通じて農業や農産物に対する理解を深める良い機会となっている。講師の分かりやすい説明と、丁寧な指導により、参加者からは、「楽しく学ぶことが出来た。」等の感想があり、大変好評である。会員の企画運営に対する努力と、広報にも力を入れてきたことで地域への認知度も高まり、近年では募集定員を超える応募がある。特に「シクラメンの寄せ植え体験」や「みそ作り体験」は人気が高く、毎年度の企画として定番になりつつある。

## 3 取組を通じたアドバイザー会員への影響

会員は、地域住民との交流を通じて、消費者目線による豊橋市の農業及び農産物の評価等を聞くことができ、以前と比べて、地域住民が地元の農産物がより身近に感じていると認識するようになった。さらに、地域住民に自分の農産物や農業を理解してもらうことで、経営に対して誇りを持つことができ、モチベーションの向上にも繋がっている。

そのほか、会員の企画力や提言能力が向上し、地域の女性リーダーとしての自覚が高まることで、農業委員等の社会参画に繋がっている。また、サポート役を担当した会員は、協力し合って運営することで、会員同士の結束力が高まっており、活動が活性化している。

#### 4 ロゴマークの活用と今後の発展方向

食農教育体験会は農村生活アドバイザーの活動をPRすることも目的の一つであることから、地域住民に親しんでもらえるように「N（農村）S（生活）A（アドバイザー）31」の愛称を付け、ロゴマークを製作して活用している（図1）。ロゴの虹には生産者と消費者のかけ橋になりたいという意味が込められており、今後も継続して活動し、地域住民へのさらなる理解促進を図っていく。



図1 NSA31のロゴ

「31」は立ち上げた24年度当時の会員が31名で、31通りの体験会ができるという意味。会員の増減に関わらず「NSA31」の愛称はこれからも続ける意向である。